

文学者の戦争責任論ノート(六)

高橋 新太郎

寺島珠雄編集・解説の『時代の底から——岡本潤戦中戦後日記』(一九八三年八月、風坡社)、一九四四年三月十八日(土)の項に次の一節がある。へ……撮影所のかへりに中野政乃(政野、重治妻、女優原泉)と一緒に重治宅へ行く。その頃から雨はミソレとなる。重治君、勤めたいのだが、まだ警察関係があり、大体今月中にすむ筈だが、それからではどうだらうかといふ。明日秋山にそのことを話すことにする。とりとめない話をしてみても、中野はやはり「山猫」的なものを失つてゐないのを感じる。いゝ顔でいゝ眼を持つてゐる男だと、差向ひでコタツにあたりながら感じる。中野の就職がうまく行くことを僕は衷心のぞむ。かういふ男は現在まことに夢々たるものだ。岡本潤は、大映(大日本映画制作株式会社)多摩川撮影所企画部に在籍し、秋山とは、木材通信社勤務の局滑こと秋山滑であり、共にアナキズム詩人として、また解放文化聯盟の仲間として旧知の間柄である。同じく四月二十三日(月)の日記には、へ……秋山のアパートへ行き、ビール二本、酒三、四合のみながら雑談、ほんとうに「勝つための愛国詩の研究会」を僕等でやるべきぢやないか、いまの愛国詩などいふもの、あれでは負けるためのやうなもんだ、など話す」とある。一九四五年三月三十日(金)の日記には、次の記事がある。へ……昼食時にまた警戒警備で一機。朝

から二度、偵察らしい。昼食後、駒込の高村さんの所へ行く。省線駒込で降りて都電で本郷肴町までゆく途中も担当
焼跡になつてゐる。肴町から林町の高村さんの方へ行く間もずぶん焼けてゐるので、若しかと案じて行つたら、高
村さんの家は無事だった。焼けるまではこゝで頑張るといはれる。彫刻だけは、お父さんの『高村光雲』もあるの
で、他所へ預けたり、地下に埋めたりしておくつもりだといはれる。此の間から書いた詩を見てもらふ。「歴史の中
の」は全く同感だといはれる。今こそ、ほんとうの詩人とウソの詩人とのケジメのはつきりする時だなどといはれ
る。これから仕事をされるらしいので一時間程話して辞す。『智恵子抄』の初版本を頂く。寺島珠雄の解説によれば、
一九三五年（昭和10）一月から、岡本が無政府共産党事件で約九十日を杉並の留置所で過ごしたとき、高村は留守宅
にカネを送っているという。一九四五年五月二十三日（水）の日記には、へ……文報（日本文学報国会）から「特攻
隊顕彰の歌」を献納せよといつてくる。さういふ歌は書けない」と記している。敗戦後の十一月四日（日）には次の
ごとく記す。へ……壺井の所で新しく出た共産党の機関誌『赤旗』を見る。天皇制打倒を主張し、社会党、自由党な
どの批判をさかんにやつてゐる。社会党、自由党に対する批判は当然だと思ふし、僕らもやらねばならんと思ふが、
共産党独裁に対しては、依然として賛同し難いものがある。一切の政治運動に対して、所詮、左裡できないものあ
ることを改めて痛感する。やはり、自分の立場といふことになる、フナーキズムを考へずにはゐられない」と。そ
してその八十日後の、詩集『襦袢の旗』（一九四七年一月二十五日、真善美社）の序文には、へ今日広場に街頭にひるが
えるはよごれたらるるの旗でなくあたらしい鮮明な赤旗である、へまた私の暗うつぶらいの過去を総決算する意味と
をくめてらるるの旗を詩集の題につかうことにした、と書かれていた。

らん、の旗

おなじ道を

おなじ標的を見つめて

たたかつてきた 永い 重庄と寒冷の時間――

時には高く理想を掲げ

若い情熱に身を燃やし

共に身を敵に投げつけ

時にむざんな敗北の中で 破れ 傷つき のたうち……………

そして突如おとずれた青空の下で

君は色鮮かな赤旗の中にのまれて行つた

君は言うだろう 思想の自由を――

君の輝く瞳の底に燃える

貪らんな真実探究の熱情

それが

同志や 友愛や

一切の過去の世俗の愛をふみにじつて

あの群衆の行進に身を投げた

けれど私は世俗の友愛で君を追う
無数の 無数の
無頼や 悪徳や
高邁や 優美や
もろもろの過去の想い出が私の胸をしめつける

しかしそれが何だろう
友情とはいつたい何だ？

君は君の道を行き

私は私の道を行く

集団と 組織と 強権と

個人の尊厳と 自由と 友愛と

この道はやがて一つになるだろうか

進み行く群衆の波濤の中で

私は孤独な人間の道を見つめ

世俗の友愛の渴望で君を呼ぶ

ああ色鮮かな赤旗の波よ
われらが掲げるらんるの旗よ

植村諦は、宮崎護編輯の詩文学雑誌『鱒』第三号（昭和22年9月、赤絵書房）に「艦縷の旗は折れて」と題する一文を寄せ、……岡本潤君が、どんな気持でらんるの旗を捨てて、赤旗の下に走つたのかは知らない。岡本君とは十數年来の友情であり、時には一つ釜のメシを分けて食ひ、岡本君がこの詩集で示した賤劣無頼の生活を共にし、時には共に獄窓で月を見た仲だが、こんな重大な転回に当つて遂にその心境を聞かせて貰う機会を得なかつた。それだけに岡本君が共產党に入党したということ聞いた時は誰よりもひどいショックを受けた。まるで何十年も連れ添つた妻君に突然逃げられたやうな孤独と寂寥に襲はれた。そして永い間友情について、思想について考へ沈む日がつづいた」と書き、〈鮮かな赤旗の前にむざんに折れたらんるの旗よ、私はこの折れたらんるの旗を抱いて、賤劣無頼の道をこの世の唯一つの高貴な思想と生活としてこれからも歩いて行かねばならない〉と結んだ。

〈祖国を愛しない奴が何処にあるか／我々にはそいふ愛し方はしない。／そいつらが非国民と呼ぶ様な愛し方をするのだ〉。植村は、金子光晴・岡本潤・小野十三郎・秋山清を編輯同人とする詩誌『コスモス』創刊号（昭和21年4月）で「文学者と祖国について」論じ、〈愛国〉の呪文によつて〈国賊〉と呼ばれ〈亡国の悪鬼〉と呼ばれた戦中に作つた、自ら覚える詩の終章をこう書きとめた。また第二号（昭和21年6月）に「私の戦争犯罪について」を書き、〈外の分野の人ならともかく文学者といはれる程の人は、他人を徹底的に追求する前に、まず自分の無力と、弱さを――人間の功利的な、小さな利己的な――徹底的に万人の前に曝け出して、自分を洗ひ清めてから立ち上るべき〉ことを説いた。

北川冬彦・安西冬衛・近藤東らを後楯として安彦敦雄・山崎馨らによつて浦和から創刊された詩文学同人誌『氣球』（昭和昭和21年9月）は、「戦犯容疑詩人列伝（其二）」として「藤原伸二郎」をとりあげ、その「まへがき」で麻川文雄はまず〈果たして私にその資格があるかどうか〉と自問した上、太平洋戦争の中期に、日本文学報国会は、建艦献金、戦意昂揚という明確な目的を以つて詩部会会員に「辻詩」の献納を懇願し、『辻詩集』（昭和18年10月、八紘社杉山書店）一卷にまとめられたが、これを見ると、大家・中堅・新進を問わず、現代日本の人のほとんどが戦意昂揚のための「愛国詩」を書いており、〈先頃来、しきりに高村光太郎の戦犯性を追求してゐる壺井繁治、岡本潤でさへそ

ここに名を連ね……岡本潤は「世界地図を見つめてゐる」といふ作品、壺井繁治は「鉄瓶に寄せる歌」といふ詩を執筆し、〈愛国詩は一篇も書かなかつたとその節操を一部の人たちから諷へられてゐる北園克衛も「軍艦を思ふ」一篇を献詩してゐると云つた体たらくだ〉と言ひ、〈戦争中にあたかも志士気取りで戦意昂揚のため御奉公してゐた詩人が、敗戦となるや、手の裏を返へしたやうに反戦詩を書いたり、民主々義を唱へたり、ほうかぶりしてテンとして恥づるところがない〉のに憤を感じてこの列伝を書くことにしたと述べている。詩誌『コスモス』第六号（昭和22年8月）の〈プロレタリア詩批判〉特輯に、北川冬彦は「プロレタリア詩について——私の立場から」を執筆、日本プロレタリア作家同盟員時代を回想して〈詩の新生面は社会、現実と云うものと関連なくしては展げない。生活が大切だ。一等正しい生活はプロレタリア詩運動の中にあると確信〉して、西沢隆二・伊藤信吉にすゝめられたのを機に同盟に加入したこと、またこの運動が、〈私の視野をひろめ、生甲斐を感じせしめた〉が、日本プロレタリア作家同盟は、当時非合法に追い込まれていた日本共産党の合法活動面として文学団体の観があつたか、「政治の優位」とか「政治からの立遅れ」などがやかましく言われ、この政治の圧力こそが重大な原因をなして、見るべき作品をプロレタリア詩の中に残し得なかつたのだと言ひ、また〈壺井・岡本が自分のことを棚にあげて戦犯追求をやる〉と云う手ぬかりがあつたのも、政治的色彩の団体が背後にあると云う安易な意識（それは滞在意識かも知れない）があつたればこそであろうと考えることも出来る〉とのべた。北川は、前年九月の『東京新聞』（12日、14日）の「敗戦後の詩と詩人」と題した一文でも壺井・岡本が自分のことは棚上げして戦犯追求をやることの不合理を指摘していた。

このことは、後に吉本隆明の「高村光太郎ノート——戦争期について」（『現代詩』昭和30年7月9日）や「前世代の詩人たち——壺井岡本の評価について」（『詩学』昭和30年11月）などであらためて論議を呼び、武井昭夫によつて、『現代詩』誌上でその戦後責任をも問われることとなる（戦後の戦争責任と民主主義文学）昭和31年3月）。

己れの戦争責任を問うことにおいて、植村謙のごとき姿勢を保持し得た文学者は、はなはだ稀れであつた。

（つゞく）